

法蔵の一乗大乘への批判について

吉 津 宜 英

一 問題の所在

中国の華嚴学派の人々は共通して一乗ということを説くが、どの人も同じ内容で、同じ説き方をしているかという^①と、決してそうではない。特に智儼（六〇二―六六八）と法蔵（六四三―七二二）との一乗説は大きな差異を示す。この点については既に別稿^②において論じたのであるが、今は問題の所在として要点のみを記そう。

すなわち、同別二教判について、従来は智儼がその基礎的な理念を提出し、弟子の法蔵がそれを大成したといわれているが、私は同別二教判こそは智儼教学の中核を成す教理であり、したがって彼において完成されているのであって、弟子の法蔵はその師の教理を变容せしめたのであると考える。もう少し具体的にいえば、智儼は『華嚴經』の場に『法華經』の一乗説を導入することによって、同別二教を完成したが、それら二教は智儼の教判である漸頓円三教の中の円教の内容

として対等に位置づけられる。つまり、別教一乗としての華嚴の法門は三乗小乘人天乘などの一切を超出してゆくが、同時に同教一乗は一切の教えに関わるものとされ、一切の機根が華嚴の法門に与る道を開く、このように二方向の内容が具わっているからこそ円教と称される。このような同別二教並存、対等の円教は智儼の最初の著作である『搜玄記』から一貫して出ている。^③

このように智儼にとつての同別二教はその教学の中核を形成する程の内容であるが、それは彼一代限りのものであり、法蔵においては名称や形式は伝承されているが、内容的には全く異つたものとなつた。このことは、いわゆるの『華嚴五教章』^④における同別二教の用例を調べると明らかである。これも既に論じたので、結論的な要点のみを述べよう。すなわち、『五教章』の第一章「建立乘」の冒頭で「然るに此の一乗教義の分齊、開いて二門と為す。一には別教、二には同教なり。」（大正蔵四五卷四七頁上）とあり、確かに全篇に智

儼と同様の名称が用いられ、「所詮差別第十」では円教の下で二教が扱われ、形式的にも智儼と同一のようにも見受けられる。しかし、根本的なところで智儼と異なる。それは、法蔵が円教の下で同別二教を対等に位置づけていないということである。言いかえれば、法蔵は『華嚴經』の教えを円教とし（これは智儼と同じ）、それを別教一乗のみと限定し、決して同教一乗をそこに付随させない。確かに、「所詮差別」ではないかにも円教の下に二教が扱われているように見えるが、よく検討してみると「同教」の側面は許容しても、注意深く「同教一乗」の面は円教の範囲に持ち込まれていないことがわかる。

それでは同教一乗はどのように扱われているのであろうのか。それは必ず『法華經』の内容であると規定されている。ここにおいて同教一乗は円教の内容から排除され、『華嚴經』の世界に関わらず、むしろ『法華經』の教えのこととされたのである。前に述べたように華嚴円教の内容を形成する両翼としての智儼の同別二教とは全く異なる法蔵の把握の仕方、つまり別教一乗優越の姿勢を見い出すのである。

そこで、何故に法蔵において智儼の同別二教論が別教一乗独善論に展開したのかというのが本論の問題の所在なのである。この問題について私は結論的に言うならば、法蔵が各種の一乗説を批判しつつ、自己の教学を形成した結果として同

別二教の間に亀裂が入り、別教一乗は『華嚴經』に、同教一乗は『法華經』にという分断が生じたのであろうと思う。

それでは具体的にどこで、どのように、どんな一乘大乘説を法蔵は批判しているのであろうか。私は『探玄記』において、円測（六一三―六九六）と法宝（生没年不詳）の二人、そして『起信論義記』で元曉（六一七―六八六）への批判を想定しうると考えるが、この論文では『探玄記』を検討し、そこに一乘大乘批判がどのように出ているかを検討してみたい。

二 『探玄記』『立教差別』の検討

『探玄記』の玄談の第三「立教差別」は全体で教判論を展開する段であるが、(1)古説を叙す、(2)是非を弁ず、(3)西域を述ぶ、(4)相違を会す、(5)現伝を明す、(6)権実を定む、(7)開合を顯わす、(8)教の前後、(9)義に就いて教を分かち、(10)理を以て宗を開くという順序で十門分別を行う。

まず、(1)では菩提流支（？―五二七）の一音教以下、法蔵以前の十家の教判を列挙する。『五教章』の十家（大正藏四五卷四八〇頁）との差異など問題になるが、今は『五教章』で第十番目に取り上げられていた玄奘（六〇二―六六四）の三種教が『探玄記』では除かれていることにだけに言及しておく。次に(2)では是非を弁ずといいつつも、是のみで非の面は無い。

さて、(3)は戒賢と智光の空有の論争の紹介と、さらに(4)はその議論についての法蔵流の融会である。すでに『五教章』(五〇一頁上)に清弁と護法の論争という形で取り上げられていたものが、日照三蔵(六一二―六八七)のナランダ寺における最新情報を得た結果として、戒賢と智光との間のものになった。ここでのポイントは、戒賢の『解深密經』に拠る三時教はすでに玄奘によって紹介済みのことであるから、中国に未伝の『妙智經』に基づくといわれる智光の三教の存在であろう。『解深密經』に依る三時教については、すでに菩提流支や真諦(四九九―五六九)などの訳經や注釈を通じて広く知られていたが、改めて玄奘によって紹介されてみると、その説の重みが人々に実感された。法蔵も『五教章』(四八一頁上)では三時教には『華嚴經』を掲めるところがないと言うほどである。いわば、勝手に、自分の目的に合わせて教判を作り上げていたところに、本当は仏陀の教えはこのように展開したのだよと言われて、かなりショックを受けた様子も伺われるのである。したがって、同様に『妙智經』という經典に由来し、しかも竜樹や清弁の流れを承ける智光が戒賢の三時教に真向から反対する三教を掲げたというニュースは法蔵にはありがたかつたはずである。したがって、(4)の両者を融会するところでは、智光の方が一乘説ということから、智光の方を優位にして位置づけている。

法蔵の一乘大乘への批判について(吉津)

ただ、注意すべきことは、その会釈の中で法蔵が「二説の三教は各の初に小(乘)を説く。華嚴は初に説けり。如何んが会釈するや。」(大正蔵三五卷一一三頁中二〇行)と問うところである。『五教章』の「決択前後意」(四八三頁上中下)のような機根論で、二説を法蔵の体系の中に融会はしているものの、結論的には先の一文から法蔵は『解深密經』と『妙智經』に由来する二種の三教説を教判としては不十分としたことがわかる。

これらの二説は一応西域のこととして扱われたが、法蔵の眼前にはこれら二説の対立と関連した大きな論争があった。それは三乘大乘と一乘大乘との間の成仏論争であり、法蔵は(5)と(6)とで、この問題を取り上げている。「現伝」という言葉に、根本的にはインド伝来の考え方だけれども、現実に中国でも論争が行なわれているという感じが出ている。ここで、まず法蔵は(5)で入寂の二乗の成仏を認めない三乘大乘とその成仏を認める一乘大乘の双方の典拠になる經論を列挙する。前者については『大般若經』『解深密經』『瑜伽論』『十輪經』などの經論が引用され、後者については『涅槃經』『法華經』『法華論』『入楞伽經』『勝鬘經』『密嚴經』などが列挙される。これらの經典の列挙について、法宝の『一乘仏性究竟論』が円測の『解深密經疏』を参照しているという根拠^③。無一力氏の指摘により、私も法蔵の經論の列挙と『解深密經

疏』とを対照してみた。そして、明らかに法蔵も円測の注釈を参照したことを確認したのである。

このことはどのような意味を持っているのであろうか。法蔵は円測に拠っているのであらうか。結論的に言えば、円測と法蔵の立場は全く異なり、法蔵は円測のような一乘大乘家をも批判していると考えられる。ただ、法蔵自身の別教一乘の論証にとって重要な前提であることは、円測に対しても元曉と同じ程度の位置づけが必要であらう。

ところで、法蔵は法宝の教学を参見しているであらうか。

この認定はむづかしいが、私は(6)の権実を定めるといふ項の検討から、参照していると判断するに至った。それはこの項で法蔵が『解深密経』の三時教に関連させて、まず「一乗は是れ権にして、三乗は是れ実なり」（大正蔵三五卷一二三頁下三行）というサイドの典拠の一つとしての法華第二時教説への言及と、次に「一乗は是れ実にして、三乗は是れ権なり」（同、二四行）と主張する論者の三乘真実論者への反論の有力な根拠としての『法華経』は『解深密経』の後の説示である」という主張がいずれも法宝に拠るのではないかと思う。

特に法華深密後説（法華は深密の後で説かれたから、一切皆成となるのだという主張）は『究竟論』の議論のポイントと言ってもよいのであり、そのオリジナリティを法宝に帰せしめて、それを法蔵が援用して、自らの別教一乘の論証の一環として

使ったと考えてよいのではなからうか。この法宝との接点はもう少し検討する必要がある。

以上のように、この(5)と(6)との部分に円測あるいは法宝の影響が伺われる。しかし、あくまで法蔵は自己の別教一乘の建立のために両師の説を援用するのであって、決して両師に賛成するのではなく、むしろ結果として全面的に否定することになる。それを確認するために、一応最後まで「立教差別」の検討を続けよう。

もう一度(5)と(6)との要点を記せば、(5)では三乗家と一乗家との双方の典拠となる経論を列挙し、(6)では三乗家の方から一乗家の典拠を批判したり、一乗家からの批判に対して防護したり、また逆に一乗家の方では三乗家の根拠をくずそうとする。このあたりの議論は基(六三二一六八二)や円測、さらに法宝の教学を法蔵がアレンジして、対立的にきわだたせているといえよう。このように両者を土俵に上げて、法蔵が行司を務めるという図であるが、勝負の面では明らかに一乗家の方に軍配を上げることになっているわけである。

さて、ここまでの議論で法蔵が『華嚴経』が別教一乗であるという自分の主張を前面に出すための準備は整ったといつてよいのである。すなわち、華嚴別教一乗にとつての論敵は一通り、そろったというべきであらう。まず、三乘大乘が一乘大乘の前で、もはや敵ではないことは明らかである。あと

は、これまでの議論で浮び上ってきた各種の一乗説の区切りをつけるだけである。その作業が(7)と(8)とで行なわれる。まず(7)では『解深密經』全体を三乗と規定した後で『法華經』と『涅槃經』の内容を「異を破す」一乗とし、さらに『華嚴經』を「直体」の一乗と呼ぶ。さらに(7)の後段では『解深密經』で説くものを「存三」の一乗、『法華經』の内容を「遮三」の一乗、そして『華嚴經』の教えを「表体」の一乗と、それぞれの区別を行う。さらに(8)では四門に分けて種々に論じられるが、結論としてはいかに『華嚴經』の一乗が成道以後の「初説」であり、それ故に「根本教」であるかを示そうとしたものに他ならない。それに比べると『涅槃經』は明らかに最後の説法であるし、『法華』『深密』さらに『妙智經』の一乗説ですら「末教」という扱いにならざるをえない。

さて、(9)(10)は五教と十宗という法藏独自の教判を示す。特に(9)で『解深密經』の三時教の第二と第三とを合せて大乘始教とし、『五教章』の教判の場合との差異を示したのも法宝の教学の受容によるのではないかと思う。

三 一乗大乘への批判

これまでの「立教差別」の検討から、法藏は三乗家の基の教学はもちろんのこと、特に円測や法宝のような一乗家の文献を参照して、行論を進めていることが分った。しかし、一

乗家の説を参照し、受容しているからといって、それらを認めたということにはならない。むしろ、結果的にはそれらの一乗家の教え方は法藏の華嚴教学と同居しえないという意味からは、法藏によって批判されているといってもよいであろう。

ここで取り上げた円測の教学は玄奘のもたらしした唯識仏教をベースにして矛盾しない限りで、できるだけ真諦系の教学や竜樹系の思想を融合してゆこうというような方向での一乗家であった。玄奘系の仏教は大乘始教に、そして真諦系は終教に収める法藏が、円測のような唯識一乗と同居できるわけではない。また涅槃一乗を究竟と考える法宝のような教学は法藏からみれば終教分齊と判じられ、華嚴別教一乗の教えにははるかに及ばないと考えたことであらう。

さらに、法藏は『起信論義記』において、全面的に元曉の『起信論疏』を批判してゆくが、これも単に元曉が『華嚴經』と『起信論』とを一体視しているとか、あるいは『起信論』の教学と玄奘所伝の仏教とを和諍しようとしているとか等への批判ばかりでなく、根本的には元曉思想の低流となっている法華一乗への批判こそが真意というべきであらう。

すでに江南の三論や天台学派の教学において一乗思想は十二分に発展していたが、特に玄奘仏教の伝来に対する反撥は一段と各種の一乗思想を開華させたのである。とりわけ一乗

法蔵の一乗大乘への批判について（吉津）

思想の一番の拠りどころは『法華経』の教えといつてよいであらう。あの涅槃経一乗を唱える法宝も法華を以て深密の三時説を一蹴しようとする程であった。

法蔵はこれらの一乗家たち、特に『法華経』を所依とする諸思想に対して華嚴別教一乗の教学を主張しようとした。師の智儼からの伝承として、彼にとつて『法華経』は必要なのであった。しかし、他の或る一乗家のようにそれで十分ではなかった。そこで法蔵は自分の別教一乗の立場から『法華経』を同教一乗と限定して位置づけた。この限定はひとえにこの小論で述べたような法蔵の一乗大乘家への批判の結果であると考える。

- 1 拙稿「華嚴同別一乗の成立と展開——法蔵の別教一乗の特異性——」仏教思想学会発刊『仏教学』第二十七号に掲載
- 2 湯次了栄『華嚴大系』（三二八頁）では智儼の素旨を受けて、法蔵が周備完成したと述べる。
- 3 『搜玄記』から、このような同別二教を認めることに對して、織田頭祐氏の「華嚴一乗思想の成立史的研究——地論宗教判史より見た智儼の教学——」（『華嚴学研究』第二号、一九八八年一〇月、一七〇頁以下）において批判を受けた。私の反論は注1に示した論文で述べたので、参照していただきたい。
- 4 本書のテキスト論については、拙稿「華嚴五教章の研究」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』三六号、一九七八年三月）を参照していただきたい。

5 注1と同じ。

- 6 「一乗仏性究竟論」の共同研究（『印仏研』三五二、一九八七年三月）を参照。また具体的なテキストについては統藏経（影印本九五冊）所収の卷第三と、『龍谷大学論集』第四二九号（一九八六年二月）と、『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第二五集（一九八六年）とに収められている浅田正博氏の翻刻本に拠る。

- 7 根無一力「一乗仏性究竟論の撰述と時代的背景」（『叡山学院研究紀要』第九号、一九八六年十一月）。この論文より多くの御教示を受けたことを記し、感謝する。

- 8 『解深密経疏』卷四（統藏影印本三四冊三八八頁左下から三九〇頁左下まで）

- 9 私もここで円測を一乗大乘家として認定したが、これは羽溪了諦「唯識宗の異派」（『宗教研究』一一一、三、四、大正五年）における議論とは異なる。羽溪博士は円測が五姓各別を認めず、天台華嚴の一乗家に同じたとまで言われるが、本文を読めば彼が正面からの議論としては大唐三蔵と呼ぶ玄奘を尊崇し、五姓各別を認めた三乗家であることは明らかである。それをベースにして、出来るかぎり一乗や一切皆成の、特に真諦系の仏教を融合してゆこうとする姿勢を私は一乗家と見る。いわば、唯識一乗家と称してもよいであらう。木村邦和氏の「真諦三蔵の学説に対する西明寺円測の評価——解深密経疏の場合——」（『印仏研』三〇一、一九八二年二月）、「西明寺円測における真諦三蔵所伝の学説に対する評価（一）」（『長岡短期大学研究紀要』第五号、第六号、一九八二年一月、十二月）など一連の論文は細密な検討によつて、円測がやはり玄奘教学をベースにしていることを明らかにした。ただ、木村氏が「円測は真諦の影響を殆んど受けていず、逆に玄奘に忠実であるということ

であった。」という結論は意外というべきであらう。私は木村氏の分析を拝見して、玄奘をベースにしつつも、そこに大いに真諦説を生かし、両者の無矛盾の所で教学を建立しようとする姿勢を見い出す。円測にとって真諦教学の影はやはり大きいというべきであらう。

10 『探玄記』の国訳の注はいかにも、こちらの論者を法蔵の立場であるかのように説明するが、この『法華経』を典拠とした「有説者」も『華嚴経』を別教一乗と考える法蔵にとって批判の対象となることは明らかである。

11 注6所引、『龍谷大学論集』所収の『究竟論』巻一「教時前後章第三」の行數番号129—131の「妄云、」の法華第二時説と、同じく132の「今、更に十義を以て法華経は、深密の後の説にして、是れ第四時の教なり。」以下の議論を参照。

12 これまで基の教学について言及しなかったが、この「立教差別」の処々に彼の教学を予想した批判がみられることは言うまでもない。今の(6)の三乗家の教説の内容は主として彼のものに拠ると思われるが、この小論は一乗大乘の扱いの方にポイントを置いているので、三乗大乘への言及が少くなることを御了解いただきたい。

13 赤尾栄慶「法蔵教学に於ける始教と終教―『五教章』と『探玄記』の相違をめぐって―」(『仏教学セミナー』第四〇号、一九八四年一〇月)を参照。

14 注6所収の『龍谷大学論集』所収の『究竟論』巻一「教時前後章第三」(行數番号128以下)の「五述法異」の「定性二乗」の成不成をめぐる議論を法蔵が参照した可能性がある。

△キーワード▽ 法蔵、華嚴、一乗大乘

(駒沢大学教授)

法蔵の一乗大乘への批判について(吉津)

新刊紹介

江島 惠教 編

『梵文阿毘達磨俱舍論 I 界品』

〔インド学仏教学叢書 I〕

A五判・八九頁・一、八五四円(税込み)
山喜房仏書林・一九八九年九月二十九日刊